

令和元年6月3日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03013

研究課題名(和文) 現地調査を踏まえた「荒ぶる神」の鎮祭伝承の共同研究

研究課題名(英文) Collaborative Study of the Mythology on Placating 'Malevolent Deities' in Ancient Fudoki: Fieldwork Results

研究代表者

坂江 渉 (SAKAE, WATARU)

神戸大学・人文学研究科・非常勤講師

研究者番号：00221995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、風土記の「荒ぶる神」の鎮祭伝承について、現地調査を踏まえた分析を加えた。その結果は次の通りである。伝承地の多くは、交通の難所であり、かつ経済・軍事上の要地であること、本伝承は、風土記編纂時に、伝承比定地で、特定氏族が神祭りをを行っている縁起と地域掌握している正統性を、始祖の功績の語りを通じて示そうとする神話であること、伝承中にみえる定型句は、聞き手に対して信憑性を持たせようとする口承の名残りであること、祭主一族は、倭王権により計画的に派遣され、その時期は、対外的危機が高まる6世紀半ば頃であること、派遣策そのものは、倭王権による地域編成策の一環をなすと考えられること、などの点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来、交通祭祀研究や往来者による境界祭祀論の立場で取り上げられてきた「荒ぶる神」の伝承を、地域社会の居住氏族の側で語られていた始祖伝承の一類型として捉え直した点に、最大の学術的意義がある。

また日本の在来信仰においては、祇園信仰や疫病神信仰などに典型的にみられるように、「崇り神」や「荒ぶる神」は、丁寧な祭りを繰り返すことを通じて、かえって祭る者の「守護神」に転換する現象がみられる。「荒ぶる神」の鎮祭伝承は、その嚆矢として位置づけられるものである。これを見出した点にも、本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research into tales of 'malevolent deities' in Fudoki developed analysis of the topic through fieldwork. Its findings include the following: (1) Most of the sites of these myths were either difficult for the passage of transportation or were of strategic importance. (2) These myths were attempts in the early eighth century by local priestly families to legitimate their right to conduct religious ceremonies through narrating the meritorious deeds of their ancestors and thereby to control the locality. (3) Set expressions in the myths were traces of oral wordplay in order to demonstrate their authenticity to village audiences. (4) The priestly families in each place had been dispatched in about the mid-sixth century by the Yamato polity that was facing the threat of foreign invasion at the time. And (5) that policy of dispatching such families was in order for the Yamato polity to grasp political control of the regions.

研究分野：日本古代史

キーワード：風土記 荒ぶる神 崇り神 口承 始祖伝承 祭祀 王権 地域編成

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者を中心とする研究グループは、2000年代初頭前後から、フィールド調査を重んじた『播磨国風土記』(以下、単に風土記と略する場合がある)研究を開始した。これまで、(1)科研費・基盤研究(C)「播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究」(平成19~21年度)、(2)同「播磨国風土記の現地調査研究を踏まえた古代地域社会像の提示と方法論の構築」(平成22~24年度)、(3)同「歴史学と考古学による播磨国風土記の地方神話史料群の共同研究」(平成25~27年度)をすすめてきた。

こうした研究をすすめるなか、新たな研究課題に浮かび上がってきたテーマは、風土記の神話史料に含まれる、特定一族の「遠祖」「祖」などの功績を強調しようとする始祖伝承を、地域祭祀論や地域支配論のなかに、如何に位置づけるかの点である。その素材となる史料群が、「荒ぶる神」の鎮祭伝承であった。類例史料は播磨国の5例だけに留まらず、肥前国3例、摂津・筑後・伊勢・但馬国(各1例)など、あわせて12例、6国の風土記(逸文)に及んでいる。

従来、古代の始祖伝承は、氏族系譜論を中心に研究が深められてきた。しかし地方神話のなかの始祖伝承に関しては、ほとんど検討されていない。また「荒ぶる神」伝承も、これまで交通の「境界」祭祀論として議論されてきた。

ところが「荒ぶる神」の神話の中身をみると、そこでは「荒ぶる神」の怒りや崇りが、最終的に特定の人物(ある氏族の始祖)が発揮した特殊な能力や才智によって鎮められ、往来者と地域社会に平和と安全がもたらされたことが強調されている。これは明らかに、神話にもとづく「始祖」伝承の一形態といえるものである。

2. 研究の目的

そこで本研究では、現存する風土記とその逸文に、合わせて12例みられる「荒ぶる神」の鎮祭伝承のうち、兵庫県内の7例(播磨5・摂津1・但馬1)と九州北部の4例(肥前3・筑後1)にスポットをあてた。現地調査にもとづく分析を加えることにより、伝承比定地の地域構造の特色と、それに対する大化前代の王権や広域権力による地域編成形態と、その類型的特質の解明をめざすことにした。

3. 研究の方法

本研究では、つぎの4つの方法を重んじた。第1に、伝承比定地の地形環境や交通路のあり方を把握し、それぞれの地域が地元の広域権力や王権にとってどのような土地であったかを分析するために、各伝承比定地の現地調査を実施すること。調査に際しては、地元自治体関係者の協力を仰いだ。第2に、各伝承比定地の中世以降の資、史料に眼を向けた。それを通じて、古代の当該地の歴史的環境を探る手がかりを得ようと試みた。第3に、研究対象とする史料群が、神話の中の「始祖」伝承であるという事実を重んじて、それぞれの始祖をいだくという氏族集団の考察をおこなった。第4に、神話の中に含まれる「半死半生」の定型句に対する口頭伝承論的アプローチを加えた。そうした定型句が具体的な祭祀の場で果たした役割、あるいは多くの異なる地域に伝播している意味を、伝承の担い手である上記の個別氏族のあり方と結びつけて分析した。

4. 研究成果

3年の研究期間を通じて、次の5つの研究成果を得た。

(1)伝承比定地の地勢学的位置について

従来、伝承比定地は、坂(峠)、河川渡渉地など、もっぱら交通路上の「難所」であると捉えられてきた。たしかに本伝承における「荒ぶる神」は、激流・洪水等の河川災害、驟雨・濃霧・気圧の変化など、各地の「荒ぶる自然」を体現する神格である。しかしその一方、フィールドワークと中世以降の資、史料を分析すると、当該地が交通の難所であるとともに、各地の物流の結節点で、かつ戦略的要地であることが判明した。この伝承比定地をめぐる新しい捉え方について、その成果を坂江渉が第3回古代地域社会史研究会、明治大学日本古代学研究所主催・公開シンポジウム、ひょうご歴史文化フォーラム in 兵庫県立考古博物館などで発表した(学会発表(1)(11)(12))。

(2)「荒ぶる神」の鎮祭伝承の本質

これまでの研究で、「荒ぶる神」の鎮祭伝承は、交通障害神伝承、境界祭祀論などとして、伝承地を通過する往来者の視点で論じられてきた。しかし風土記における本伝承は、最終的に「荒ぶる神」を鎮め祭った在地氏族の側の視点で説かれている。なかでも漢人・衣縫・額田連・県主・筑紫君氏などの「始祖」や、筑紫宗像郡の珂是古、久波乎など、特定一族の始祖的人物の活躍や功績・才智を強調する形で記されている。これは神話にもとづく「始祖」伝承の一類型として捉えられるものである。また「荒ぶる神」の神格は、鎮祭を繰り返すことを通じて、地域守護の神威に転換している。

これらにもとづき、本研究では、「荒ぶる神」の鎮祭伝承の本質を、各国風土記の編纂段階の「今」、それぞれの伝承比定地で、特定氏族が祭主として「荒ぶる神」への祭祀をつかさどっている縁起と、地域掌握している正統性を、始祖の功績の語りを通じて、人びとに示そうとする

口承的神話の一部をなすことを明らかにした。その成果を坂江渉が、『古代東ユーラシア研究センター年報』3号、『古代史料を読む』上巻などで執筆し(雑誌論文(6)(13))、また古市晃が、図書(1)や学会発表(9)で公表した。

(3)伝承にみえる定型句について

本伝承にみえる「此処を過ぐる者、十人の中、五人を留め」「五人の中、三人を留む」などの定型句的な文言については、旧来の研究では、その学術的意義がほとんど問われていない。しかし本研究では、ニュージーランド在住の日本文学者、エドウィーナ・パーマー氏の研究成果を積極的に取り入れた。パーマー説にもとづき、これらの文言が、具体的な数値の提示を通じて、聞き手に対して伝承の信憑性を持たせようとする、「口業」(Wordplay)の一つであることを指摘した。つまり本伝承は、もともと各地の祭りの場で、上記人物などを始祖にいだく祭主の一族によって口頭で説かれていた、「神語り」であることを明確にした。これらの成果については、坂江が雑誌論文(5)(15)で執筆するとともに、学会発表(3)(11)(12)などで報告した。

(4)「荒ぶる神」の祭祀をつかさどる一族

本伝承で「荒ぶる神」を鎮め祭ったという始祖名としては、「県主等の祖の大荒田」「久波乎」など、古代の開発に関連する名前が挙げられている。また氏族名としては、「漢人」「衣縫」など、渡来系一族が多い。これらの事実は、「荒ぶる神」の祭祀をつかさどった各地の祭主一族が、自発的に移住してきたのではなく、倭王権や広域的権力により計画的、意図的に派遣・配置され、それぞれの土地の地域「開発」(啓明も含む)にあたっていたこと、またその後、定着に至ったと考えられることなどを指摘した。これらの成果については、坂江渉と古市晃が、雑誌論文(13)(16)などで公表し、また高橋明裕が学会発表(10)で報告した。

(5)祭主一族が派遣された時期と倭王権の地域編成策

「荒ぶる神」の祭主一族が派遣された時期は、地域ごとに偏差があるが、おおむね朝鮮半島をめぐる対外的危機が高まる6世紀半ば以降の可能性が高いこと、また派遣策そのものは、同時期の西日本を中心とするミヤケの設置策と同様、対外的危機に起因する、倭王権による地域編成策の一環をなすと考えられることなどを明らかにした。この成果については、坂江渉が雑誌論文(1)(12)と学会発表(4)、古市晃が雑誌論文(2)(10)(14)と学会発表(7)(9)(13)などで発表した。

○今後の課題

調査過程を通じて、第一に、本伝承の比定地のような、水陸交通の難所で、かつ経済的・軍事的要衝地域においては、神祭りと仏教信仰の場(廃寺・瓦散布地・椅寺など)が並存していた可能性が高いことに気づいた。両者の相互関係は如何なるもので(たとえば祭主一族と檀越氏族の関係や地域編成原理の違いなど)、それぞれが果たした社会的役割をどう理解したらよいかなどの点が、新たな研究課題として浮上した。これらの課題解明について、坂江渉が雑誌論文(3)と学会発表(1)(2)において、今後の研究の方向性を展望した。

第二に、5~6世紀の倭王権の地域編成のあり方を探るうえで、淡路島や大阪湾岸など、西日本各地の「海人」の動向を究明することが、重要なカギを握ることがみえてきた。これについては、坂江渉が雑誌論文(1)(4)、古市晃が雑誌論文(14)において、その成果の一端を述べた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計16件)

- (1) 坂江渉、「倭王権形成期の海人の地域間交流 -信仰と神話を素材にして-」、『島根県古代文化センター研究論集 国家形成期の首長権と地域社会構造』、22集、2019年、447-456頁、査読なし
- (2) 古市晃、「五世紀の王権」、仁藤敦史編『古代文学と隣接諸学』(竹林舎)、3巻、2019年、23-44頁、2019年、査読なし
- (3) 坂江渉、「生存と生殖の維持と日本古代の地域社会」、『歴史学研究』、977号、2018年、2-10頁、査読あり
- (4) 坂江渉、「「国生み」神話と淡路の海人の習俗」、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室編『ひょうご歴史研究室紀要』、3号、2018年、118-136頁、査読なし
- (5) 坂江渉、「『播磨国風土記』の口承性」、『姫路市史編纂だより』、21号、2-3頁、2018年、査読なし
- (6) 坂江渉、「風土記」、小口雅史・佐藤信編『古代史料を読む』(同成社)、上巻、54-69頁、2018年、査読なし
- (7) 古市晃、「王の名前にかくされた史実を探そう」、佐藤昇編『歴史の見方・考え方』(山川出版社)、なし、2018年、104-115頁、査読なし
- (8) 古市晃、「大化期の王権構造」、『歴史評論』、821号、2018年、23-44頁、査読なし
- (9) 古市晃、「葛城と出雲」、島根県古代文化センター編『古代出雲ゼミナール』(ハーベスト出版)、巻、2018年、33-45頁、査読なし
- (10) 古市晃、「五・六世紀における倭王と王族」、『堺市文化財講演会記録』(堺市文化観光局文

化部文化財課)、10号、2018年、23-42頁、査読なし

- (11) 高橋明裕、「古代の賀茂郡と北条町小谷」、『わたしたちの小谷』(兵庫県加西市)、なし、2018年、41-43頁、査読なし
- (12) 坂江渉、「志深ミヤケの歴史的位置をめぐる基礎的考察」、『ひょうご歴史研究室紀要』、2号、2017年、102-118頁、査読なし
- (13) 坂江渉、「『播磨国風土記』の神話からみる祭りの諸事の縁起譚」、『専修大学社会知性開発研究センター編『古代東ユーラシア研究センター年報』、3号、2017年、177-191頁、査読なし
- (14) 古市晃、「国家形成期における淡路の位置」、『ひょうご歴史研究室紀要』、2号、2017年、119-137頁、査読なし
- (15) 坂江渉、「『播磨国風土記』研究の新動向」、『歴史と神戸』、318号、2016年、1-8頁、査読なし
- (16) 古市晃、「記紀・風土記にみる交通」、『館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報』、2巻、2016年、2-26頁、査読なし

〔学会発表〕(計13件)

- (1) 坂江渉、「神祭りと古代寺院の地域史的考察」、『第3回古代地域社会史研究会、2019年
- (2) 坂江渉、「古代播磨の郡境をまたぐ「道」と白鳳寺院」、『第29回出雲古代史研究会、2018年
- (3) 坂江渉、「祭りの起源と神話 - 『播磨国風土記』を中心に -」、『島根県主催「出雲国風土記シンポジウム」(招待講演)、2018年
- (4) 坂江渉、「古代の海人と地域間ネットワーク」、『島根県立古代出雲歴史博物館主催「古代出雲誕生展」関連講演会(招待講演)、2018年
- (5) 坂江渉、「国生み神話と古代の海人」、『淡路島日本遺産委員会等主催「淡路島古代史の魅力を探るシンポジウム」(招待講演)、2018年
- (6) 古市晃、「オケ・ヲケ伝承に関する基礎的検討」、『第8回東播西撰研究会、2018年
- (7) 古市晃、「State Formation and International Relations in Ancient Japan」、『The 9th Kobe University Brussels Centre Symposium(国際学会)、2018年
- (8) 古市晃、「古代の淡路島と海人」、『淡路島日本遺産委員会等主催「淡路島古代史の魅力を探るシンポジウム」(招待講演)、2018年
- (9) 古市晃、「播磨における国造とミヤケ」、『国学院大学国史学会・平成29年度国史学会大会(招待講演)、2017年
- (10) 高橋明裕、「伊和大神信仰の諸相」、『平成30年度第4回穴粟学講座(招待講演)、2018年
- (11) 坂江渉、「歴史学から読み解く播磨国風土記の神話」、『明治大学日本古代学研究所主催・公開シンポジウム「『播磨国風土記』研究の現代的意義」(招待講演)、2016年
- (12) 坂江渉、「歴史学からみた風土記の「交通障害神」説話と倭王権」、『ひょうご歴史文化フォーラム in 兵庫県立考古博物館(招待講演)、2016年
- (13) 古市晃、「『播磨国風土記』からみた倭王権の地域編成」、『明治大学日本古代学研究所主催・公開シンポジウム「『播磨国風土記』研究の現代的意義」(招待講演)、2016年

〔図書〕(計1件)

- (1) 古市晃、『国家形成期の王宮と地域社会 -記紀・風土記の再解釈-』(塙書房)、522頁、2019年

〔その他〕

坂江渉と古市晃の雑誌論文の一部を、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室のホームページに公開した。<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekiken/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：古市 晃

ローマ字氏名：FURUICHI, AKIRA

所属研究機関名：神戸大学大学院

部局名：人文学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：00344375

研究分担者氏名：高橋 明裕

ローマ字氏名：TAKAHASHI, AKIHIRO

所属研究機関名：立命館大学

部局名：文学部

職名：非常勤講師

研究者番号(8桁): 90441419

(2)研究協力者

なし